

聖教の域に不合といふ事あるべからず。」「鑑草、翁問答、春風の類、御読被成候はば、俗心除可申候。」「三教共明德を明にする教なれ共」等から、藤樹思想の根幹（良知・孝）の理解と学ぶ方法論は大筋踏襲し、より宗教的になったように思われる。

神道思想における生命主義的救済観

鈴木 一彦

対馬路人・西山茂・島蘭進・白水寛子の「新宗教における生命主義的救済観」（一九七九）で研究課題として提示された「日本の宗教伝統との比較」について、大祓詞や中臣祓の註釈書などに窺える祓の思想に焦点を当て、神道と金光教を事例として取り上げ、日本の宗教伝統と新宗教の両者が有する生命主義的要素と救済観との関わりについて究明を試みた。そして、金光大神の信仰形成上、重要な役割の一端を果たしていた六根清浄祓や大祓詞といった祓詞は、呪術的宗教性に裏打ちされた祓の思想に基づく詞であることから、近代化を促した大衆的倫理革新をひきだす力となった新宗教の呪術的宗教性の一つに、この祓詞との関わりから生じる信仰があるのではないかとの推測のもと考察を行った。

まず、呪術的宗教性に裏打ちされた祓の思想とはいかなるものであったのかを、律令祭祀における二季恒例の大祓をはじめ

め、伊勢神道や吉田神道における中臣祓の註釈書を中心に窺った。その結果、二季恒例の大祓は、前半の儀と後半の儀に分かれる二重構造となっており、前半の儀で東正文部の読む祓詞は東文忌寸部の横刀を献る時の呪という呪詞であり、後半の儀で中臣の宣る祓詞は大祓詞であった。この二つの儀は、呪術的行為などから生じる災気を祓の対象とすることで、災禍から身を守るという祭儀であった。そして、十一世紀以降、宣読体形式の大祓詞とは別に、奏上体形式の中臣祓を用いた個人祈願が、陰陽師によって担われ、やがて貴族社会から広く庶民一般へと拡大していった。そして、鎌倉中期頃に成立した両部神道書『中臣祓訓解』では、中臣祓は、恒例の大祓のように災気を祓うのみならず、心の清浄や、神仏の恵みや、苦しみからの救済を約束する呪術的な祝詞と解釈されるに至る。また、中臣祓本文を唱えるのとは別に、清浄に関する偈を唱えることで心が清浄になるという、もう一つの儀が、中臣祓本文中に内包されるという二重構造をもつようになる。この二重構造は、『倭姫命世記』などの伊勢神道書や、伊勢流中臣祓の註釈書にも窺える。一方、恒例の大祓は、応仁の乱以降に廃絶するが、その頃、吉田兼俱によって創唱されたのが吉田神道であった。その吉田神道では、中臣祓を十二段に分け、それぞれの段落が、どのような効用をもつかが明確に示されると共に、各段落で完結した祓詞がつくられるに至る。そして、伊勢神道で重んじられた清浄に関する偈も、吉田兼俱がつくったとされる六根清浄祓に「清く潔き偈」として受け継がれていくが、この六根清浄祓には、神の宿る心を清浄に保つことを通じて、天地万物と一に

第13部会

なり、すべての願いが成就するとある。このように、伊勢神道や吉田神道の祓の思想には、恒例の大祓に窺える呪術的宗教性をもとにしながら、個人祈願に応えるといった「現世利益」のみならず、神や天地万物と合一するという究極的な「救済」への道筋が示されている。そして、その救済観を支える神道思想の世界観には生命主義的要素が多分に含まれていた。

しかし、古学神道家によって、それまでの中臣祓の解釈が否定され、律令祭祀で用いられた大祓詞の解釈が行われるようになる。中臣祓本文中に清浄に関する偈が内包されているといった二重構造は否定され、禊祓も心を祓い清めるものではなく、身の穢れを清めるわざであるといった解釈がなされるようになる。その一方で、大祓詞と共に用いられたと考えられた「天津祝詞乃太祝詞」の復元が試みられるという新たな思想的潮流も生み出されていった。このように、伊勢神道や吉田神道の祓の思想に窺えた生命主義的要素や救済観が後退する中で、新たな生命主義的世界観や救済観が模索されることになるが、その過渡期に信仰を形成した一人が金光大神であったと考えられる。

弘道館とその祭神

——会沢神学の構造——

桐原健真

本発表は、後期水戸学の大成者として知られる会沢正志斎

(一七八二〈天明二〉—一八六三〈文久三〉年)が、一八四一(天保一二)年に創立された藩校・弘道館における祭神選定問題にいかに関与したかを検討することを通して、「神儒一致」を標榜していた水戸学におけるイデオロギーとしての神道の位相を明らかにすることを目的とするものである。

弘道館には儒学の伝統として孔子が奉斎されている(ただし孔子廟は一八五七〈安政四〉年建立)。そして神儒一致の立場から、このほかに日本の神も祀られている。それが鹿島神・タケミカヅチである。弘道館に奉斎すべき神として適当な存在は、ほかにも存在したはずであった。たとえば、会沢は、一八五八(安政五)年に、水戸藩の西方に位置する笠間藩が設けた藩校の時習館のためにその館記を草しており、その中で次のように記している。

国の中央を卜し、文武の館を合せ、以て子弟の学習に便ならしむ。時習の名は旧に仍るも、而して宇倍神(武内宿禰)と孔子の神とを合せ祀る。宇倍神は我が祖先の仍を自りて出づる所にして、神後の西韓を征し、天威を海外に揚ぐるを佐く。(「時習館記」〈安政戊午、代笠間侯〉、『会沢正志斎文稿』国書刊行会、二〇〇二年、一四〇頁)

すなわち笠間藩で孔子とともに祀られているのは、藩主の祖先神としての宇倍神であって、会沢もまたこれを高く評価しているのである。すなわちそれは神功の親征を佐けた(忠)祖先神の偉業を称える(孝)という忠孝一致のイデオロギーの具現化であったに違いない。このように考えると、水戸徳川家の藩校である弘道館に祀るべき神とは、やはりその祖先神あるいは東照